

最新！宗教情報 /// No. 2
---

### ◎インドでテロ続発、キリスト者への襲撃止まず

【C J C = 東京、10/06】インドでテロが続発している。人口約 11 億人の宗教構成は、8 割を占め、政治・経済・社会などでも優勢なヒンズー教に対し、イスラム教（14%）、キリスト教（2・5%）、シーク教（2%）、仏教（1%）などと、複雑。さらに地域によってその比率も異なり、都市部ではヒンズー教徒が半数以下のところもある。

インドでは、地方・州によって「改宗禁止法」がある。出自（ジャティ）である宗旨を変えてはならない、としているが、実態はヒンズー教徒の改宗を阻止するためのもの。ヒンズー教徒の懸念が、ジャティを離れる改宗者の増大にあるのは、社会秩序の基盤が揺らぎ、ヒンズー教の優位を失わせることにつながる。

イスラム教徒やキリスト者が「改宗禁止法」反対の声を上げること自体が紛争の原因にもなっているが、せめぎ合いの後、同法の改変、廃止を決めたところもある。

今夏以降、爆弾テロが多発する異常事態が続いている。連邦政府は、イスラム教徒とヒンズー教徒の対立をあおる狙いが事件の背後にあると見ている。バングラデシュなどを拠点とするイスラム過激派組織の連絡団体『インディアン・ムジャヒディン』（IM）の犯行との見方もあるが、IMの実態は不明だ。

ヒンズー教徒とキリスト者との対立は、キリスト者の多くがヒンズー教からの改宗者なことが、背景にある。東部オリッサ州では、1970年代に1万4000人弱だったキリスト者は現在約8万人という。ヒンズー教側には「再改宗」を勧める動きも活発化している中で、インドで伝道に力を入れている集団『ニューライフ・ミッション』の動きがヒンズー教徒の敵視を買ったと見られる。

ヒンズー教過激派は、キリスト教宣教師が、無料で教育したり医療活動を行うことで、貧困層や最下位のカースト層を「買収」している、と言う。

オリッサ州では、7月ごろから、農村地帯のキリスト者が襲われ、家を焼かれたり、少女が強姦殺人されるなどの事件が続発、一部のキリスト者が難民化している。8月に入って、キリスト者のデモ行進が行われたがいずれも平和的なものだった。23日、カンダマルでヒンズー教指導者ラクスマナンダ・サラスワティが射殺された。これがヒンズー教徒の怒りを買って、事態は泥沼化の様相を深めた。狙撃したのはキリスト者だと主張されたものの、マオイスト（毛沢東主義者）・テロ団体の幹部との説もある。

オリッサ州で10月1日、キリスト者の住居300家屋以上が放火され、1人のキリスト者女性が殺害された。8歳の子どもを含む6人も重傷を負った。同州では、キリスト者に対する暴力が先鋭化した8月24日以来、10月1日までに、迫害で命を失ったキリスト者は60人。破壊された教会は178、放火された家屋は4600軒、被害を受けた教会系の学校は13に及ぶ。避難民は5万人以上で、負傷者の数は約1万8000人に上った。

### ◎公立高校でヒンズー教を広めるな～保護者がヨガクラスの中止を求める

【U.S. FrontLine, 10/08】公立学校でヨガを教えることはヒンズー教の指導につながり、「政教分離」に違反するとして、ニューヨーク州北部の保護者と宗教指導者らが中止を要求している。

AP 通信によると、ニューヨーク州メセナ学区の公立高校の教師2人は昨年、試験前のストレス解消の方法としてヨガをボランディアで教えていた。2人は特殊教育とスペイン語の教師で、このヨ

ガのプログラムを学校区全体で展開する準備中だった。しかし、「ヨガのクラスでヒンズー教を教え込まれている」という苦情が保護者などから寄せられたため、現在、この準備活動は中断されている。

カルバリー・バプティスト教会のコリン・ルシッド牧師は「ヨガの長所は理解しており、それに反対する訳ではない。その背後にある哲学とヒンズー教との結びつきと、その表現方法に反対している」と理由を説明している。

一方、メセナ学校区のジュリー・リーガン教育長は、「2人の指導教師が陰で宗教的な意図を持っているならば、クラスを認めるはずがない」と反論。「2人は、運動で生徒をリラックスさせ、学習意欲を向上させたいだけだ」と主張している。全米 26 州の約 100 校がヨガを教えており、教師がヨガ指導員資格を取得するための資金も政府が援助している、とリーガン教育長は説明する。

全米ヨガ協会のウェブサイトでは、ヨガは宗教ではなく、ヒンズー教以外にも世界的な宗教で取り入れられていると説明している。心と体の調和を目的とするヨガには 100 以上の流派がある。米国で最も一般的なのは「ハタ・ヨガ」で、動きとポーズ、呼吸法を重視する。

コロラド州アスピンの保護者は、2002 年に公立学校での授業カリキュラムからヨガを排除することに成功。アラバマ州でも、学校でのヨガ指導を禁じる法律が宗教団体の主導で 1993 年に施行された。

## ボンヘッファーの生涯

1906～1945

1

## 誕生

- 1906年
  - プレスラウ(現在、ポーランドのプロツラフ)で生まれる。父カール・ボンヘッファー(精神医学の教授)がベルリン大学に招聘されたため、ベルリンに移り住む。
  - 8人兄弟姉妹の6番目。ボンヘッファー家は、ヒトラー政権への抵抗運動に深く関与していた。

2

## 神学の学び

- 1923年
  - 17歳でテュービンゲン大学で神学を学び始め、後にベルリンに戻る。
- 1927年
  - 神学博士の学位を取得(21歳のとき)。
- 1928年
  - 1年間、スペインのバルセロナにあるドイツ人教会で牧師補として働く。
- 1929年
  - ベルリンに戻り、大学教授資格論文に取り組む。
- 1930年
  - アメリカのユニオン神学校に留学。エキュメニカル運動との出会い。

3

## 牧師・神学教師として

- 1931年
  - ベルリン大学の私講師として組織神学の講義を始める。
- 1933年
  - ナチ政権が成立。ボンヘッファーは、ヒトラーが演出しようとしたメシアニズムの問題を、早い時期に見抜いていた。
- 1934年
  - 告白教会によって「バルメン宣言」が発表される。「教会闘争」の開始。
- 1935～40年
  - フィンケンバルデの牧師研修所で教える。
- 1937年
  - フィンケンバルデの牧師研修所が国家秘密警察(ゲシュタポ)によって封鎖される。以降、地下活動に。

4

## ナチズムの嵐の中で

- 1938年
  - 牧師がヒトラー一人に対し忠誠の宣誓を求められる。多くのキリスト者が「健全な民族感情」を示す。
- 1938年11月9日
  - 水晶の夜。ナチの突撃隊やSS隊員が、各地のユダヤ教会堂に放火し、またユダヤ人の家屋を破壊した。
- 1939年6月
  - 兵役拒否のため、ニューヨークに渡る。すぐに帰国。
  - ラインホルド・ニーバーに宛てた手紙「わたしがアメリカに来たのは間違いでした。わたしは、わたしたちの国の歴史の困難な時期をドイツのキリスト者たちと共に生きなければなりません。もし、わたしがこの時代の試練を同胞と分かち合うのでなければ、わたしは戦後のドイツにおけるキリスト教的生活の再建にあずかる権利を持たなくなるでしょう。」

5

## ヒトラーへの抵抗

- 1939年9月
  - 第二次世界大戦が始まる。ボンヘッファーは、国防軍諜報部の対外連絡員として勤務する。ヒトラーに対する反乱計画に参加。
- 1943年4月
  - 逮捕され、テーゲルの軍用刑務所に入れられる。1年以上。
  - ラトミラル教授(イタリア人)が伝える獄中でのエピソード。一人の囚人から、キリスト者として、神学者として、ヒトラーに対する反逆行為の責任をどのように取るかできるかを問われる。酔っ払った運転手がクーアフルステンタムの通りを車を猛スピードで運転しているたとえを語る。犠牲者を埋葬し、遺族を慰めることが牧師の唯一の仕事にはならない。もっと重要なのは、この酔っ払いから無理やりでもハンドルを取り上げることはないか。

6

## ボンヘッファーの最後

- 1944年
  - 7月20日、クーデター失敗。9月、ベルリン近くのツォッセンにあった諜報部の文書が発見され、ボンヘッファーらの反乱計画への関与が明るみに出る。10月8日、ベルリンのブリッツ・アルブレヒト通り8番地のゲシュタポの地下牢に移される。
- 1945年2月
  - ブーヘンバルト強制収容所へ、さらに、バイエルン・バルト、レーゲンスブルク、シェーンベルク、フロッセンビュルクへ。
- 1945年4月9日
  - SSによる即決裁判、絞首刑。39歳。
  - ベイン・ベストに告げた最後の言葉「これが最後です。しかし、私にとっては生命の始まりです。」
- 1945年5月30日、ヒトラー自殺。

## ドイツ教会闘争(1)

ドイツのプロテスタント教会が1933年から45年に至るまで、ヒトラー政権による教会の組織・教義への干渉に抗して行った闘争をいう。それは部分的には、ナチスの非人間的政策そのものに対する批判にまで発展した。

33年首相に就任したヒトラーは、最初は教会に対して宥和的な態度を示していたが、まもなくナチズムに迎合する(ドイツ・キリスト者)を介して、教会への干渉を始めた。すなわち従来の領邦教会を一元化して帝国教会を作り、帝国監督をその上に据えることを企て、さらにユダヤ人排除政策である(アーリア条項)を教会関係立法に導入しようとした。

ニーメラーらは、それを教会秩序の破壊であると抗議し、(牧師緊急同盟)を組織し、多くの参加者を得て運動を開始した。すなわち各領邦教会内で勢力をもつドイツ・キリスト者に抗して告白会議が組織され、さらに34年5月にバルメンで第1回告白教会全国会議が開かれ、有名な(ドイツ福音主義教会の現状に対する神学的宣言(バルメン宣言))が採択された。

## ドイツ教会闘争(2)

しかし情勢の深刻化にともない、告白教会内部における非妥協的な全国常任委員会と保守的な領邦教会の人々の対立がしたいに深まっていった。一方、政府は告白教会に対しての強圧の度を強め、35年に教会省を設けて、教会問題に直接介入してきた。そのようななかであって、告白教会は当時のドイツにおけるほとんど唯一の抵抗の拠点として、良心の声をあげつづけた。ことに36年ごろからは、単に純粋な教会問題だけでなく、ナチスによる人間性破壊の事実に対して抗議の声をあげた。

しかしニーメラーらの指導者をはじめ牧師や教会役員に対する逮捕投獄が相つぎ、危機的状況に陥った。ことに39年の第2次大戦の勃発によって、組織的抵抗としての教会闘争は不可能になり、戦いは地下活動的なものに移行せざるをえなかった。(井上良雄)

『世界大百科事典』(平凡社)より